



学園でまじゅぱす
パニック

おしえて退魔先生

小説 酒井 仁
挿絵 あおいまなぶ

二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版

プロローグ

第一章 メイドさん、ご奉仕

第二章 獣耳少女のフェロモン？

第三章 ツンデレロリータ、暴走

第四章 不思議系少女、欲情す

第五章 それぞれの居場所

006

019

057

097

142

196

登場人物紹介

Characters



なでしこ
撫子

お姉さんのな物腰柔かいクラスのまとめ役。しかし、発情するとメイド姿に変身する巨乳の少女淫魔。

ねね・ねねね

猫耳と尻尾を生やす、猫系の淫魔少女。本能のママに行動する無邪気すぎる性格。

リリーベル・ヴィレッタ・オッペルハイマー

欧州で発見・保護された、金髪・ロリ体型のヴァンパイア系淫魔少女。

ハルナ

出所・来歴が一切不明の淫魔少女。変身後はゴスロリドレスを纏う。

さくらづか ござえ
桜塚 梢

夏目の上司で退魔師協会の人事官を務めるクールビューティ。

なつめ まさちか
夏目 正央

退魔師協会に所属する、元少年退魔師。ある事情により現在は一線から退いている。

プロローグ

春は出会いと別れの季節である。

「協会」からの呼び出しを受けた夏目正央なつめ まさひろは、いよいよ解雇通知かとやや陰鬱な、あるいは少々清々しい気分を味わっていた。

（積もりに積もった有給もそろそろ尽きたか。これからの当てもないんだけど）

夏目正央、十八歳。外見はひよろつとした平凡な眼鏡の青年だが、実はこの若さにして希有な才能を持っている。

彼が呼び出された協会人事課は官庁街に近い雑居ビルに間借りをした地味な場所で、人事課員数名が気ぜわしく出入りしている。書類仕事が多いのだろう、たくさんのファイルが書棚に並ぶ。機能的で無味乾燥な場所だ。そこに出向いた夏目を待っていたのは、えらく巨乳な美人だった。

鮮やかな赤のスーツはどこか威圧的で、タイトスカートは恐ろしく短い。きゅつとくびれた腰からヒップにかけての曲線は、大人の魅力を感じさせる。背も高くモデル体型とはこういうのを指すのだろう。

（あれっ、この女性、見覚えがあるぞ）

これほどの美形なら、まず忘れはしないだろう。髪はストレートにまとめられ、すつきり通った鼻梁の下の、大人びた唇に鮮やかなグロスが挑発的だ。金属フレームの眼鏡の奥で、切れ長の目が夏目を値踏みするような視線を向けてくる。

一見して、真意を感じさせない無表情さに少し気圧されてしまう。

その独特の雰囲気に見覚えがあつた——夏目正央がまだ見習いだった頃、研修で訓練を受けたことがある。確か、名前は桜塚さくらづか梢すえ。

「ああ。よく来てくれた。早速だが、異動通知だ」

梢の声音は穏やかで落ち着いているが、どこか逆らえない力を感じさせる。その迫力に圧倒されつつ、夏目は彼女の言葉を繰り返す。

「い、どう……?」

予測してなかった回答に、夏目は少々面食らう。第一線で役に立たなくなった自分に、いまさらどんなポストがあるというのか。

「これは新しい試みでな。さしあたりお前には教官役になつてもらおう」

古来、人外の「魔」を狩る者は洋の東西を問わず存在した。

「魔」とは異世界からの侵略者であり、澱みの集積物であり、人に害為すものどもの総称である。一般にそれは都市伝説や心霊スポットとして巧妙に偽装されている。情報操作を

行っているのは「退魔師」の互助組織である協会。

時の為政者とも密接に関わってきた退魔師の組織は、政治の中枢にも深く食い込んでい
る。しかし退魔師は多くを個人の才能に頼っているのが現状。単独で行動するよりも、情
報を共有したり報奨金を出すことで、世に魔が溢れるのを防いでいるのだ。

わずか十二にして怪魔を退けた経験を買われ、夏目は退魔師協会に属することになった。
以来、学生と退魔師の二足のわらじを履きこなし、天才少年退魔師として活躍し続けてき
た。ある事件が起こるまでは。

その事件以降、現場を退いて三年近く開店休業状態である。少年をこき使ってきた退魔
師協会とはいえ、これ以上無駄飯食いを放置しておくわけにもいかなかったのだろう。
なら、解雇されても一向に構わない。

「新人相手の教官なんて、柄じゃありませんよ。ブランク長いですから」

「教える相手は退魔師じゃない。お前の生徒となるのは魔物……それも淫魔の少女が四人
女子校の教師だ、男の夢だろうよよかったな」

口調こそふざけているが、その声は決して笑っていない。決して覆らない決定事項を
粛々と告げる口ぶりに、夏目は言葉を失う。

「保護、捕獲された魔物の教育と更生施設への出向だ。上層部はお前が適任だという結論
を下した。拒否権はない」

「なっ」

切れ長で美しいうえに冷徹、氷点下の眼差しに思わず言葉を失う。

いや、数瞬あつて、「保護、捕獲された魔物の教育と更生施設」という部分に、自らの耳を疑う。そんなことを本当に夏目にさせるつもりなのか。

「魔物と称する存在は、すべてこれ悪であり、滅する他はない……お前はいわゆる強行派ではなかったと思うが？」

「それは、そ、そうですが、ほ、本気なんですか？ ま、魔物の更生施設なんて」

予想外の言葉に二の句が継げない。天才退魔師の仮面の下から年相応の顔が覗く。

「我々は常に人手不足なのだよ。使えるものは親でも魔物でも利用する。我々で制御できるものなら、召喚師と契約させて戦力に加えればいい。ところで、夏目」

と、いつさいの感情を見せなかつた梢の目に、ある表情が宿る。艶っぽい光が夏目をねつとりと見つめ、軽く唇を舐める仕草にぞくりとするような色気を感じる。

「これは個人的な興味なんだが、お前は童貞か？」

「は——？ そ、そ、そんなはずないでしょう！ な、何を言つて」

あからさまに動揺する夏目を前に、巨乳人事官は嘆息する。

「あまり耐性がなさすぎるのも問題だな。そこに座れ、夏目正央」

パイプ椅子に腰を下ろすと、すかさず桜塚梢が身を寄せてくる。決して広くはない人事

課はいつの間にも人払いされたのか、彼と梢の二人きりになっている。

ふわりと甘い女体の体臭に思わずドキリとする。見栄を張ってはみたが、夏目はまだ童貞だ。柔らかな表情は美男子といっても問題はない、だろう。十八歳にしてはやや童顔だろうか、まだ完全に成熟していない少年の面影を残している。夏目が退魔師などでなければ、さぞや同世代の少女の母性本能をくすぐっていただろう。

（男女交際の暇なんかあるものか。にしても、この人どういうつもりだ？）

緊張に身を固くしていると、「す……」と軽く肩を抱かれ、頬ずりをされる。

丁寧に入れられた爪も眩しい小さな白い手が、ゆっくりと時間をかけて夏目のストラックスのつけ根に近づいてくる。「はふうっ」と暖かな息を耳に吹きかけながら、梢は手のひらを夏目の股間に押し当ててくる。

「なっ」

「……退魔師も一人前になると、欲望を避けるだけでは駄目だ。受け入れ、放出し、解放する技を覚えろ。プロならば一発でな」

首筋にいまにも口づけせんばかりに顔を近づけつつ、リズムカルに股間を揉みほぐしてくる。若い男性器は程なくその刺激に屈し、むりむりと海綿体が充血してくる。有り体に言えば勃起し始めてくる。特に敏感な亀頭の裏筋に当たる部分を、ストラックスの上からの確に探り当ててくる様は、まるで指先に目があるようだ。

その巧妙極まる手つきは、男の快楽ポイントを知り尽くした成熟した女を強く感じさせる。手つきだけではない、間近に迫った眼差しには大人の余裕があり、吹きかけられた吐息は蜜のように甘い。夏目は一方的に翻弄される。

「さ、桜塚、人事官。ぼ、ボクはこんなことをしに来たわけでは……ッ!？」

反応しかけるペニスから意識をそらし、無理にでも引きはがそうとしたが相手は先輩で女性、力尽くはためらわれた。

そうこうしているうちに、梢は慣れた手つきでジッパを下げ、ベルトを緩めると、下着の下からすでに膨張したペニスがお目見えする。おそらく人並み以上のサイズはあるであろう肌色の肉の棒は包皮が被っている、仮性包茎だ。

さっきまでの威圧感はどう感じない。包茎ペニスにねっとり絡みつく視線に夏目は声も出ず、ただ頬が熱くなつていく。茶髪をアップにした美人は「くすつ」と決してからかい気味な笑みでなく微笑むと、亀頭にそつと手のひらを被せてくる。

陰茎に初めて感じる他人の手のひらの感触は、暖かく柔らかい。真綿に包まれたような快感に、肉茎は敏感に跳ねる。海綿体の充血と脈動を味わうように、梢は手を開いたり包んだりを繰り返し、後輩の未熟な若茎をいのように弄ぶ。激しい刺激ではないにもかかわらず、にちゃ、にちゃと先走りの汁が包皮の内側にじわりと滲む。

「意外にいいものを持つてるじゃないか。ここをこうすれば、さらにいい感じになる」

肉厚の唇が薄く歪み、女の貌かおになった上官の姿に背筋がぞくりとする。

「う、あつ？」

右手のひらでゆるゆると包皮を剥いていきながら、桜塚梢は片手で胸元のボタンを器用に外していく。しゆるつとりボンタイを抜き、ブラウスの前をはだけると、乳房の谷間が露わになる。真紅のスーツの下から現れた肉球に目が吸い寄せられる。真つ白な肌と真紅のコントラストが眩しく、丸みを帯びた曲線は一種の奇跡としか思えない。

思わず生唾を飲み込む青年に、美女は眼鏡の奥から妖しく微笑みかける。間近に見つめる女の象徴から漂ってくる化粧の香りと梢自身の体臭。包皮を剥かれた亀頭は光沢を増し、一回り大きく膨張したような気がする。

（冷たそうな人だと思っただけ、あんな顔で微笑むのか……それに、む、胸が大きくて、お、女の人にペニスを握られるなんて初めてだ）

「男が女の乳房に欲情するのは自然なことだ。人間とて動物の一種類に過ぎない。さて、お前のこの堅く膨張した男根は、何を求めている……？」

「う、く、あ」

ぎしっ……桜塚梢は微かに椅子を軋ませ、腰を上げる。人事課の狭い一室に、他に人はいない。二人っきりの空間で梢はさらに胸をはだけると、夏目の足下にしゃがみ込む。そして軽く陰茎をしごきながら、大きく張り出した乳房の間に勃起した肉棒を挟み込んでい

く。

(お、おっぱいに、閉じこめられたッ?)

生まれて初めて味わう女性の乳房は、最初少しひんやりとした。

だがすぐに谷間の奥の心臓の鼓動がとくとくと伝わってきて、じんわりと暖かくなっていく。無意識に「びくっ」とペニスに跳ね上がると、梢は「あん」と小さく愛らしく声を漏らす。思いもかけないかわいい声に、夏目は緊張の極致で動けない。

「なんて顔してるんだ、夏目。つい苛めたくなる」

肉厚の唇から唾液が糸を引いて谷間に落ちる。それを潤滑油代わりにすると、眼鏡の美女は自分で自分の乳房を持ち上げて「ぬちゃり」と肌で陰茎を擦り上げた。染み一つない滑らかな女体にペニスを摩擦され、夏目は喉の奥で声にならない声を上げる。

「う、くううっ!」

「我慢しなくていい、いつでもぶちまける。欲望は己の弱点でもあるが、生命エナジーの発露でもある。己の欲望と向き合って、見極めてみる。私のおま○こを使わせてやるわけにはいかないが、乳ま○こくらい好きなものだけ使うといい、さあ」

夏目とて健康な青年、自慰の経験くらいあるが乳房で責められるのがこれほどの快感をもたらずとは。手でしごくのと違って、肉茎全体が圧迫される。女性の肌の暖かさ、柔らかさ、むっちりと吸いついてくるような肌触りが信じがたいほど気持ちいい。それに加え

て、年上の美人人事官の胸の膨らみに自分の男根が挟まれ、擦られているという視覚効果も強烈としかいいようがない。

たちまちペニスの根本が痺れ、熱い塊が下腹にこみ上げてくる。

(うああっ、柔らかくてすべすべして暖かくて、き、気持ちよすぎるっ)

もう限界だ、先輩の乳擦りで射精してしまおうと思われたそのとき、いきなり勃起茎が解放される。えっ、と見下ろすと、梢はにまにまと笑いながら両手で乳房を捧げ持っている。いやらしく舌を蠢かせながら、先端に舌先をそよがせるが、触れようとはしない。どう見ても焦らしている。

「んっふふ、なんて顔してるのよ。苛めがいのある奴だ」

経験豊かな梢は、確実に夏目の射精感を見抜いている。見抜いた上で寸止めを食らわせたのだ。本当ならあのままパイズリで発射したかったのに、とはいっても自分からそれを求めるには、童貞少年には荷が重い。

「どうした、夏目正央。退魔師の大先輩に私に何をして欲しい？」

童貞青年のうろたえぶりに、梢はS的な部分が刺激されてしまったらしい。上気した熱で金属フレームのレンズがうつすら曇っているのが、なんとも妖艶だ。魔物を相手にするのは勝手が違い、赤子同然にあしらわれているのはわかってても、対処法が何も思いつかない。

大きく開いた唇が何度も亀頭に被されようとして、寸前で離れていく。根本に絡みついていた指が痛いくらいの力で握ってくるが、それ以上のことはしない。

そんな状態がどれくらい続いただろう。いつそ「先輩の口でイカせて下さい」と言えればどんなに楽だったろう。唇を噛みしめてやせ我慢していると、「ちろっ」と生暖かいものが先端に触れた、ような気がした。

「うっ、さ、桜塚人事官!」

唾液に濡れた亀頭は完全に露出され、光沢を放つ先端が自分のペニスだとは信じられない。舌先で尿道を突くように、くるくると器用にカリの周辺を丹念にねぶってくるが、射精するほどの刺激ではない。夏目自身ですら知らなかった快樂ポイントを、梢は知り尽くしているのか、カリの裏筋を的確に責めてくる。

「ちゅむっ、ん、れる……そう簡単には出させてやらんぞ、私も愉しみたいからな」

あーんと大きく開けた唇が、ゆっくりと先端を飲み込んでいく。フェラチオという言葉と行為くらい知っているが、女性の口の中の熱に気が遠くなりそうだ。

被っていた包皮の内側は多少なりとも汚れていたはずなのに、巨乳美女はソフトクリームを味わうようにうっとりとして裏筋や棒の部分にまで舌を這わせるのだ。その一方的な奉仕というかいたぶりに、夏目は耐え続ける。

(し、刺激が強すぎる……こ、これ以上焦らされたらどうにかなりそうだッ)

自分も愉しみたい、と言ったのはあながち嘘ではないようだ。きゅつきゅと根本を軽くしごきながら、まぶしつけた唾液を丁寧な舌でこそげ、甘露のように飲み下す。最初の印象とがらりと変わり、発情した雌豹のような表情に見とれてしまう。

「もう少し頑張ってくれよ、私も、さつきからもう……んふうっ、ん」

そう言つて、しきりに太ももをもじもじさせているのは、梢自身が陰茎をしゃぶる行為で興奮している証だ。その乱れっぷりに頭が沸騰しそうになる。

「あふ、んちゅっ、んっむ。おいひい、ちんぽおいひくて、んんっ」

「うあああ、そ、そんなに吸い上げられ、たら、も、もう限界、です……ッッ」

さすがに限界と見たのか、梢は口いっぱいに勃起ペニスを飲み込んだ。喉の奥まで飲み込んで、頬をすぼめて強く吸い上げる。ぬらりとした口内粘膜に包まれ、溜め込まれていた欲望がせり上がるのがわかる。陰囊が縮み上がり、尿道を揺るがす勢いで溶岩のように熱い塊が茎を膨らませながら駆け上がってくる。

「うああああつっ、で、る……すっ、吸い上げられる……ッッッ」

ひとときわ深く飲み込んだ喉の奥に、一気に欲望汁が解放される。それをただ受け止めるのではなく、淫らな年上人事官はバキュームのように吸引し、搾り取る。腰の中が空っぽになりそうな虚脱感に襲われ、夏目の膝がガクガク痙攣する。

「どくんっ！ どく、どく、びゅるるるるるッッ」



中出しされながら、少女の膣穴もまた快美の痙攣を始め、食欲に夏目の肉竿から欲望の汁を吸い上げる。たっぷり三十秒近く夏目は射精し続け、そのあいだ撫子は夏目の頭を胸にかき抱くように、夏目も少女の甘い体臭と汗の臭いの中で、法悦境をさまよっていた。「はあ、はあ、ご主人様の、す、すごいです。こんな感じてしまったの、撫子初めてかもしれません」

名前から連想される大和撫子とは正反対の、耳をくすぐる淫らな声の響きに、ぞくりとする。そのまま誘われるように再び唇を重ねると、少女の指がくしゃりと夏目の髪を掻き回す。頭皮に触れる指先が恐ろしく心地よい。

ちゅっ、ちゅば……むちゅ、れろ………っ。

二発も出したばかりだというのに、夏目の性欲はまだまだ収まっていない。

女体を味わうというには、膣の具合がよすぎてその暇がなかったのだ。初めて味わう女芯を、もっとじっくり愉しみたかった。ふと、自分はまんまと淫魔の術中にハマっているのではないかと思う。だが、夏目の舌が首筋に移動すると、少女は面白いように反応し、アクメの揺り戻しに震える。

ショーツにくるまれた尻を揉み、太ももを撫でさすっただけで「びく、びくんっ」と足が持ち上がる。「くう、くふううん」と子犬のようなかわい声で悶えよがる目尻に涙を浮かべ、いやいやをするように首を小さく振って、それ以上の愛撫を拒む。

「ま、まだイッたばかりで、び、敏感なんです。あまり触られると……っつ」

夏目は汗ばんだ巨乳の谷間に顔を押しつけ、舌を伸ばす。れろり、と一舐めすると汗のしょっぱい味が口の中に広がると同時に、膣肉が激しく夏目を締め付けてくる。明らかに乳房への愛撫と股間の肉壺が連動し、女体を限りなく敏感な快樂装置に仕立て上げているのだ。ゆつくりと唾液を染み込ませるように両の乳房を丹念にねぶり回しながら、夏目は絶頂に達したばかりの乙女の秘肉を堪能する。

「ひっ、ひぐう、くふううう……ッッ！ ご主人様ああ」

（アソコの奥が、うねうねと蠢いてる。女の子の中って、す、すごすぎる！）

奥からねつとりと熱い体液が滲み出て夏目の分身を包み込む。だが、今ひとつ密着感に弱いような気がする。さすがに二発発射後なので、夏目もやや冷静さを取り戻している。彼はストラックスのベルトを緩めた。前をはだけて腰を浮かせ、膝まで下着ごと下げる。そうしてそつと少女の腰を抱き寄せると、さつきよりうんと肌の密着面が大きくなる。同時に、より深い部分にまで先端が押し入っていく。

「ふあっ。あ、あつたかいです。ご主人様と、私の太ももが、熱が伝わってきますう」

両腕を首に回し、肩口に顔を押しつけてくる。乳房とはまた違った髪独特の芳香が鼻孔に届いて、うつとりとなってしまう。

その背中を両腕できゅっと抱きしめてやると、撫子も乳房を夏目の胸板に押しつけてく

る。くり、くりつと鼻面を擦りつけてくる仕草が、どこか子どもっぽくてかわいらしい、
と思つた。

「もつと近づいていいんだぞ。ほら」

「あつ、くう……ッ、お、奥に、当たつてますうう」

尻に回した手で強く抱き寄せると、亀頭にコツリと固い壁が当たる。

「ひやくつ」

膣のもつとも深い部分に当たるのは、子宮か。自分がこの少女を妊娠させることはまず
不可能と知りつつ、自分と撫子がいま行っているのは、まぎれもなく生殖活動、子どもを
為す行為なのだということを、意識せずにはいられない。

そしてそれが時に男と女の愛を確認する作業だということも。まだ、顔を合わせたばかり
だということのに、外見上は年端もいかない娘とこんなことをしている。そのことが夏目の
男としての獣欲を刺激し、より強烈な快感で淫魔少女をよがり狂わせたいと切に願う。

艶やかな黒のポニーテールを優しく撫で下ろし、その感触を楽しむ。少女はまるで髪に
まで性感帯があるかのように、ふるふると背中を震わせる。

「きれいな、髪だね」

普段はむしろ寡黙で人付き合いも悪いと言われる自分の口から出るとは信じられない褒
め言葉に、夏目自身が驚く。だが世辞を言っているつもりはない。撫子のポニーテールは

見た目の艶やかさだけでなく、さらさらとした触り心地がたまらなく心地いいのだ。

少女も気持ちいいのか、夏目に身体を預けるようにもたれかかってくる。そして膣にずつぷりと収まった肉棒の固さを確かめるかのごとく、腰を微妙にくねらせる。

「んん、ご主人様のが、お腹の奥を突いてます、うふふっ」

大きな動きではないが、それだけに少女の密壺のざらりとした感触がなお快感を与えてくる。耳のうしろを舌尖でちろちろくすぐると、淫魔少女はくつくつ笑い、その振動が肉竿を優しく揺する。

そこから首筋を伝い、またあの桃色の突起物に到達すると、夏目はニップルに軽く歯を沈めていく。びく、びくつと痙攣する背中の中央、背骨の凹凸に沿って指を這わせ、撫で下ろしていく。もつともつと反応を引き出したい。いっそ淫魔少女を愉悦で狂わせてやりたいと思う。

それは激しい牡の劣情ばかりではない。自分の欲望を受け止めてくれた人外の少女に、少しでも喜んで欲しいと心から思っているのだ。

「あ……そんなに、されたら私また、あひっ、お、おっぱいの先っちよだめええ」

「痛かったかい」

「い、痛くて、気持ちいいっ。ふやあああつ、せ、背中も、あん、ああっ」

三人もの男を惑わせて精を搾り取ったはずの淫魔少女は、いまや夏目の思うがままに乱

れ、快感に翻弄されている。そのことが夏目には純粹に嬉しい。

童貞を失ったばかりの自分が、性に長けた淫魔をよがらせ、悦びを与えている。そのことが不思議で、妙に誇らしい。もつともつと、この美しい少女が悶える姿を引き出したい。「わっ、私ッ、変になっちゃう、なっちゃうううう」

「いいよ……ここにはボクと撫子くんしかいない。いくら変になっても構わないよ」

淫魔にも羞恥心のようなものがあるのだろうか。だが恥じらいつつも、撫子は両脚をぐうっと持ち上げると、膝を折って夏目の腰に絡めてくる。ずぶぶつと挿入がひときわ深くなり、根本まで飲み込まれたペニスが凄まじい力で締めつけられる。

「ぐうっ、撫子くんっ、き、きついっ」

「変に、へんになってもいいの？ 撫子、もつと感じたいですッ」

少女は命綱にすがりついてくるかのように、夏目のワイシャツを握りしめる。

小さな背中を丸め、ロデオのように身体全体を夏目の胸に押しつけ、擦りつける。荒い息が間近に迫り、心臓は早鐘のように鳴り響く。夏目はポリウム感のある巨乳を押し潰す勢いで、腕の中の少女を力いっぱい抱きしめる。

「撫子くんっ！ んっ、んちゅっ……!!」

名前を呼びながら唇を重ねると、先に舌を絡めてきたのは淫魔少女。

甘い唾液を飲み下すと、それは媚薬のように夏目の頭の芯を痺れさせる。ぬめぬめ蠢く

舌を吸い上げると、少女は小さく震え、快感に酔いしれていることが伝わってくる。夏目はもっと感じさせようと執拗に舌を吸う。

吸いながら尻に回した手に力を込めると、思いきり抱き寄せる。
ごっんっ。

分身の先端が、激しく子宮を突き上げるのがわかった。途端に締めつけを増す膣肉。窮屈な奥を貫くように突くと、どうつと奥から濃厚な蜜液が溢れ出て、肉の凶器を包み込む。子宮口が解放されたことで、撫子も感極まったように夏目にしがみつく。

「んふうううっ、んっ、んううっつっ！ くああああ〜んっつっ」

ふはつと唾液の飛沫を吐きながら、撫子は一転、夏目の膝の上で海老ぞりになる。

夏目の腕の支えがなければ、そのまま後方に転倒してしまっていただろう。ただしすらりと長い両下肢は蟹バサミのように強烈な力で夏目の腰を挟み込み、痙攣を繰り返している。まぎれもなく撫子は再度のエクスタシーに達していた。

下肢のつけ根はものすごいことになっている。

夏目の注ぎ込んだ精液が逆流し、それが撫子の流した愛液と混じり合い、そこに汗や潮がブレンドされ、摩擦と体温で温められて得も言われぬ匂いを放っている。男と女の本能を刺激し、ただの発情した動物に戻す禁断の香りだ。

メイド服の黒い生地はぐっしりと濡れ、大きな染みは裾にまで広がっている。夏目自

身の下半身も少女と大差はない。決して心地よい湿り気ではない。ないはずなのに、汗があるほうが興奮するような気がする。

見た目と違って鍛えられた下肢のバネを使つて、ぐつしより濡れた粘膜を堅い肉棒で貫き犯す実感が湧いてくる。まだまだ三発目なのでまだまだ余裕がある。この際だからと夏目は腕に力こぶを浮かべ、じつくりと少女の肢体を揺すつてやる。ぐちゅぐちゅと艶めかしい音を立てて、深々と鋭い突き入れを繰り返す。

「んひっ、ふひい、ひいい、んんっ。らめえ、おちんぼすごい、すごいいい……」

もはや淫魔少女の喉から漏れるのは、か細いよがり声。肉壺はきゅんきゅん収縮して陰茎を締めつける。互いに汗びつしよりなので、温まった体液が猛烈な臭気を放っているが、それすらもいまは夏目たちの獣欲を淫らに彩る。これから学舎となるべき教室の空気がどろり濃密になり、桃色に染まっていくようだ。

ぎしぎしと椅子と床が擦れて軋む音をBGMにしながら、夏目は教え子でもある少女をひたすら犯し続けた。

「はあっ、はあっ、はあっ！ ううっ、撫子くんの、膣ッ、お、おま〇こツツ」

「あひい、はひ……ご主人様のツ、極太ちんぽでイクウ、イカされちゃううう」

垂れ下がったポニーテールが、いまにも床に届きそうだ。文字通り馬の尻尾のように揺れる撫子の黒髪を見ながら、ぐいぐいと少女の骨盤を自らの腰の上で揺する。

しかし、すでに二回射精しているとはいえ、淫魔の膣はやはり極上の快楽を約束してくれる稀代の名器。まして童貞を失ったばかりの夏目も限界を迎えつつある。

ぐい、ぐい、グイッ。じゅぷつ、ぐちゅ、ぐちゅんっ！

メイド少女の密壺は、さつきから痙攣しっぱなし。視線は宙をさまよい、もはや夏目の顔もまともに見ていない。忘我の表情に見とれながら、若き教諭はフィニッシュのピストンを淫魔の肉穴に叩きつけた。

亀頭裏が麻痺していく。陰囊がきゅつと縮み上がる。来るべき猛烈な放出の予感。

「な、撫子クツ、も、もう限界、だ……ッ」

「もう、らめ、らめえ。く、くださいい……ッ。ち、ちんぼ汁ううッ。撫子のおま○こにぜんぶくださいい……ッッッ」

どくんっつっ。

どくつ、どくつ、どくつ、どくつ……!!

「うああああ……ッッッ」

撃ち放たれた灼熱の砲弾が、次々と少女のもつとも深い部分、子宮の入り口に激突する。「あひっ!? あ、あ、当たって、るうううッッ！」

激突のたびに撫子の身体が大きく跳ね上がり、むき出しの白い肉球が前後左右に揺れ動く。のけぞらせた顔は見えないが、きつと愉悦に狂った上気した顔は美しいことだろう。



近ごろようやく童貞を脱し、セックスの快楽に目覚めたばかりの夏目にとって、とうてい抗いきれる刺激ではない。

(駄目だ、ダメだだめだ! やめろ、それ以上その娘に近づくんじやないッ)

必死に己に向けて訴えるが、若き退魔師の膝がゆっくりと折れていく。

四つんばいで股間を弄くつてあふんあふんと悶える少女の尻の前にしやがみ込むと、そつと手を伸ばして撫でる。

「ひゃうっ?! な、なっちー……あつ、あん、あうんっ。お尻さすられると、もつと気持ちよくなるう」

はあはあと荒い息をつく淫魔娘の股間の匂いがいつそう強くなる。麝香を思わせる野性的な香り。淫芽を指で弄るのは刺激が強すぎるのか、両手を床について太ももをもじもじと擦らせる。肩越しに投げかけてくる眼差しは、確かに牡を求め発情している牝のものだ。その愛くるしさに、青年の理性はいつさい働きをやめる。

(やめてない! くそう、なのに自分で自分の手が止められない……)

夏目の指が子どもっぽいショーツにかかると、ゆっくりとそれを脱がしていく。獣少女は抵抗する様子もなく、それどころか脱がせやすいように足を広げる。すす……と布地はあつさり膝まで落とされた。

「う……あ、あああ………ッ」

こうなることはわかっていた。フェロモンの分泌箇所の中心がここであることぐらい、夏目も承知している。わかってないのは当のねねくらいのものだ。

むき出しにされたねねの花弁から、強烈な媚薬臭が漂ってくる。それは夏目の鼻孔粘膜からたやすく吸収され、彼をただの発情した牡へと変えそうになる。

（そ、それは教師として……いや、ねねくんを落ち着けさせるためと思えば）

どう聞いても言い訳以外のなにものでもないが、人間とて動物に過ぎない。夏目はおずおずと両手で教え子の尻肉を掴み、股間の谷間に顔を埋めた。

「はひゃあああつ、い、息、熱いッツツ」

初めて女性器に口づける抵抗はまったくない。むしろ肺いっぱい吸い込んだ発情フェロモンのなんと芳しいことか。貝の身を思わせる肉のひだも神秘的で、粘液にまみれて夏目を誘う。れろっ、と花弁を舌でこじ開けていくと、尾てい骨から伸びた尻尾が目の前で揺れる。口の中に潮の味が広がり、それを甘露のようにジュルルと吸り上げる。

（尿じゃない、甘い花の芳香と潮の味だ。これがヴァギナなのか）

「ひゃふううっ、くすぐった、いいいっ、気持ちいいッツツ」

少女は逃げもせず、いや自分から臀部を夏目の顔面に押しつけてくる。彼も顔ごとねじ込むように少女の股間に唇を密着させ、どこといわず滅茶苦茶にねぶり回す。

どろっ、と濃厚な肉汁が洞穴の奥から溢れ出し、夏目の喉を潤す。しかし渴きはむしろ

増していき、より乙女の蜜汁を欲する。ストラックスの中の物体は、ダイヤモンドよりも硬く硬化して、一刻も早く外に出たがっている。

「ああ、あんっ、あんんんっつっ！　ねね、こんなことされたの初めてえっ。もつとしてえっ、もつと気持ちよくしてええっ」

たとえそれがマタタビの効果だったにせよ、ねねは間違ひなく欲情している。唇をしきりにねぶり、瞳が猫のように細まっている。淫魔としての性なのかはわからないが、これ以上彼女に快楽を与える術を、夏目は一つしか知らない。

(や……やめ、ろ………つ)

いまにも本能の中に消え入りそうな夏目の理性がわずかに囁く。一瞬、ぴくりと自分の動きが止まる。だが次の瞬間、うんと伸ばされた舌がれるりと少女の肉芽から尿道にかけてを大きく舐め上げる。ぶるっ、ぶるっと大きく痙攣し、背をそらして伸びをする様は、本当に動物チックで、夏目は自らも獣のように女芯を貪った。

「ふひい!!　なに、なんかくるっ、なにこれ、なにいっくっツツ?」

クンニに身を委ねていたねねの口から、困惑の声が漏れる。緊張する尻肉にくねる尻尾。愉悅に濡れる花弁と戸惑いのギャップは、夏目の獣欲をさらに煽る。

ふしゃっ!　少女の股間から透明な潮が噴きこぼれる。猫のように背筋がピンと伸び、ぶる、ぶると細かく切なげに痙攣を繰り返す。艶めかしい教え子の潮吹きを見下ろしなが

ら、一匹の牡と化した教諭は膝立ちの姿勢で、己のベルトに手をかける。

「あつ………せんせえ………なにそれ、すごおい」

勢いよくトランクスとともに引き下ろされた股間で、それは天を仰いでいる。

撫子に童貞を奪われて以来、ズル剥けになったままの亀頭。まだかろうじてピンク色をしている先端は、すでに先走り汁で濡れ、てらてらと天井の蛍光灯の光を反射している。まるで灼けた金属のようだ。ねねは自分にはない男性器を肩越しに見つめ、自分の股間と見比べてきよとんと首を傾げる。

「あはっ、なんだそれ、ヘン、変々。それからどうするの？ どうするの、せんせえ」

「い、いいの、かい？ もしかすると、痛いかもしれないよ」

ここでまともな言葉を発せられたのは、まさに奇跡だった。もしもねねの発情が収まって嫌がられても、夏目は己が止められない。処女を散らす痛み泣き叫ぶ少女を押し倒し、目的を完遂するだろう。

しかし、淫魔少女はびくびくと獣耳をふるわせ、期待に尻尾をくねらせる。日頃好き勝手ワガママ放題に振る舞っていても、決して夏目を嫌っているわけではない。自分を楽しませてくれる面白い人間の人、とでも思っているのだろう、撫子の次に慕ってくれている。「ん………痛いのはちよっといやかもお。けどけど、せんせえのしてくれることだったら、我慢できるよ。ねえ、してしてえ」

そこが限界点だ。

夏目は四つんばいの少女の臀部をそつと押さえる。肝心の花卉が見えないので、挿入できらるうかと少し不安になるが、思いきつて腰を突き出す。特に猫耳尻尾つきのねねを背後から犯すので、いっそう野性的な気分になる。

ぐにりと女肉がたわむ。ずぶう、ずぶう……窮屈な肉のトンネルに、鋼鉄の槍がじわじわと滑り込んでいくが、思うようには挿入が深まらない。十二分に蜜液で満たされているとはいえ、小柄な少女の穴は広いとは言えないのだ。

「いた、イタタツ。せんせえ、おまた痛いよう？」

やはり処女だったのか、獣娘は破瓜の痛み悲鳴を上げる。

「すまない、痛いのは最初だけ……だから。いまボクとねねくんが繋がってるんだ。大人のセックスをしているんだよ」

大人の、というところにねねの耳がピクリと反応する。ちよつぴり目尻に涙を浮かべながら健気けんげにも微笑むねねに、夏目の胸がちくりと痛む。

「えへ、ねね大人？ 大人のおんなみたい？」

「あ、ああ。とてもきれいだよ。ゆつくり動くよ、いいね」

少女を前に押し出すように、ペニスを引き抜いていく。抜ける寸前で再び挿入に転じる。獣少女は驚きの声を上げる。苦痛はかなり減じたようだ。

「んくううッ!? な、なにこれえ、すごい。ねねの中に、ぶつとくっておつきくてあついのが入ってくるウッ？」

「くうっ、し、締まるうッ」

淫魔少女の声に、徐々にだが甘い響きが混じる。狭苦しい淫穴の奥の奥にまでねじ込むと、亀頭の先端にこつりと子宮口と思しき感触を感じる。撫子の包み込むような膣と違い、ぷりつと弾き返す弾力を感じる。衝撃に、少女の首がのけぞる。

「んひっ、それなんか……いい………ッッッッ」

びくん！ びく、びくうっ。バックスタイルなのに子宮まで達したのは、ねねが撫子よりも小柄なせいだろう。それにしても、獣の体位で犯される獣耳少女の美しさと淫らさに、夏目は魅了されずにはいられない。

もしかすると発情フェロモンに犯されていなくても、夏目はねねを抱いていたかもしれない。そう思わせるものがある。

（それに、びくびく中の肉が蠢いてる。な、なんて心地いいんだ）

夏目は撫子の膣しか知らないが、それでもねねの処女穴は相当な名器に思われた。締まりもいいが、亀頭の裏に当たる微妙な凹凸が特に心地よい。下付きの淫花は後背位にもっとも適している。このまま動かずにいるなど不可能だ。

「はにや、あつ、あ、なにこれっ、すごいよお。せんせえのがねねの中で動いてるッ。お

股がまたじんじんしてきちゃううう」

「ずずず……と腰を退き、ずぶりっ、と突き入れる。あつという間に射精に導かれそうなので慎重に動く。文字通りの「交尾」の体位で動いたびに、ねねはあひあひと快楽のよがり声を上げ、がりがり爪で床を引っかいた。

「んなああああんっ、なあっ、にやあああっ！ もっと動いてえせんせえ、ずぶずぶつてされると、ねねの頭ん中真っ白になっっちゃううんっ」

「よ、よし」

「ずずっ、ぬぶぶっ！ ずん、ずんっ。少しピストンの速度を上げていくと、耳がぺたりと倒れたり、ピンと立ったりと尻尾に合わせ目まぐるしく動く。快感を知ったばかりの少女から、面白いように反応が引き出せる。夏目がそつと尻尾を指に絡めると、「はにやあゝっ」と力が抜けてよがる。

「ふにやう、にやああああっ。お、お腹ん中あつい、熱いいいゝゝッッ。せんせえ、せんせえのそれ、すごいよおおっ」

「ち、ちんぽだよ。言ってみなさい」

「ちっ、ちんぽちんぽちんぽおおっ!! せんせえのちんぽ好きいいっ、せんせえのちんぽで、ねねおかひくなるうううう」

「単調な動きに変化をつけようと、夏目はねねの二の腕を掴む。そしてぐつと持ち上げる

と、小柄な少女の身体は簡単に持ち上がる。ヒップからくびれた腰、乳房へ流れる曲線が、あり得ないほど反り返った。

「にやうツ？ んんん〜っ、さ、さつきとまた違つて、これも気持ちいい〜っ、お股痺れちゃうんっ」

亀頭の裏筋がぞりつとした感触を味わい、夏目は声を漏らす。ねねを引き起こしたことで、ペニスの角度が変わつたのだ。ねねも敏感にそれに気づき、身をふるわせる。

「じゃあ、こんなところはどうかだい、ねねくん」

「はふううっ」

二の腕を掴んだまま、片方の手を前に回す。乳房に手を当てると意外なほどの弾力。ボリュームのある膨らみを撫でさすると、中央に堅い突起物を発見する。

「あん、なに……お胸、も、なんか気持ちいい……？」

「ここも敏感なんだね。両方いちに弄つてあげるよ」

自分の口からやけにセックス慣れたような言葉が紡ぎ出されるのを、夏目は不思議な気持ちで眺めていた。だがそれは決してよがり悶える少女を嬲ろうというのではない。少女の全身をくまなく愛撫し、さらなる高みに押し上げてやろうという気持ちだ。

幸い、ねねのニップルは敏感に反応している。夏目は腰を振つて少女の膣穴を犯しつつ、くりくりと指先で突起を掴み上げ、捏ねてやる。

「あふうううつ、お胸つ、お胸痺れるよおツツ。お股もいいつ、ま、またおかしくなっちゃううう」

「胸はおっぱい、お股は、おま○こって言うんだよ、ほら」

性を知らず、興味すらなかった無邪気な淫魔が、自分に犯されてどんどん女になっていく。そのことに夏目は興奮している。

「お、おっぱいも……おま○こもいい……ねねのおま○こ、せんせえのちんぽでじんじんしてるのお」

「覚えがいいぞ、ねねくん。ご褒美にもつともつと気持ちよくなつて」

片腕で骨盤を引き寄せ、深い一撃をくれてやる。狭い肉穴を押し広げる摩擦感は、まさしく処女穴の心地よさだ。「ぶしゃつ」と暖かな液が噴きこぼれ、床に滴る。手を伸ばして空いていたほうのニップルもつまんでやると、膣肉が陰茎を絞り上げる。がくがくと身体を揺らす少女の中心が熱く燃えて陰茎を包み込む。分身の根本が痺れるのを感じながら、夏目はラストスパートに向けてピストンの速度を上げる。

「ねねのお腹んなか、ぐちやぐちやにされてるううう！ なにこれ、なに」

「こ、これがオスとメスの交尾なんだよ。ね、ねねくんはボクのメスになったんだ」

バックから獣娘を犯す興奮と征服感に、教師にあるまじき言葉を発してしまうが、ねねも振り返つてうつとりと呟く。



「ねね、せんせえのもの？ おっぱいもおま○こもそうなの？」

「そうだつ、その証拠を、ねねくんの中に……………あああつ、出すぞ、出るっ！ ね、ねねくんのおま○こに、うあああツ」

ずしんと膣奥を亀頭がノックした瞬間、肉穴が断続的に締めつけてくる。ざらりとした肉壁を擦り上げ、力任せにえぐり込んだ。

どくんつ、どく、どく、どくツ。

膣のいちばん深い部分めがけ、灼熱の白濁が噴き上がる。その勢いは留まるところを知らず、たちまちにして淫魔少女の膣を、子宮をみつしりと満たしていく。

「んあああああつ、熱いいいいツ、おま○こあついいいいいい」

どくつ、どく、どく、どくつ、放出は止まらない。熱い塊が膣奥をノックするたび、尻尾がくねり、猫耳がひくひくふるえる。行き場を失った子種汁は結合部からこぼれ、少女の淫水に混じり合いながら、床に小さな水たまりを作っていた。

「はう……………はううう、ん……………ツ」

くつたりと手足から力が抜けた獣耳少女を慌てて抱き留める。しかし夏目の膝もがくりと折れ、どうにかねねを床に横たえようと、自分も尻餅をついてしまった。

それにしても、なんとという快感だったのだろう。

撫子と初体験したときは一度や二度の射精ではびくともしなかつたペニス^{しお}が、萎れてし

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)



全国書店で
好評
発売中

「小説」高井村正 / 挿絵：或十せねが

セクシー退魔師が神様をご奉仕で鎮める伝奇アクション!



全国書店で
好評
発売中

「小説」狩野景 / 挿絵：ぼち」

不死者を滅ぼす白刃が舞い踊る!
ちよっぴのマッドな聖女様が学園を舞台に大暴れ!!



「小説」羽沢向 / 挿絵：ピエール☆おじお

魔海少女ルルイエ・ルル

全国書店で
好評
発売中

「魔法の天使ルルイエ・ルル!
地球の未来はルルにおまかせよっ☆」

既刊LINEUP

全国書店で好評発売中

- 山嵐学園戦姫ノブナガ! ①～③
- 思春期なアダム ①～②
- 純情17歳少女探偵団、赤い探路を撃て!

- 借金お嬢クリス ①～②
- プリンセスリバーシ!! 交響する美神と魔境
- BLANGEL 絶になつて踊る患者の夜

- 無敵の姫騎士がDMMに目覚めたようです
- ピルグリムメイデン 深紅の巡礼聖女

KTC 発行 ©株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨコソビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! あとみっく文庫

検索

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!

